橋の鬼

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

橋の鬼

【Ｎコード】

Ｎ０４３４Ｅ

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

京の宇治橋にて鬼が出ていた。それを聞いた陰陽師安倍清明は鬼を倒す為に橋に向かったが。ジャパニーズファンタジーです。

第一章

橋の鬼

京の宇治橋で騒ぎが起こっていた。そこを通る者が橋の下から出て来る鬼に襲われるのだ。今のところは何とか殺された者はいないがそれでも傷を受けた者が多く出ていた。それがまた問題になっていた。

「さて、困ったことじゃ」

それを聞いた時の関白藤原道長にしても頭の痛い話であった。鬼が出たとなっては何とかしないわけにはいかない。彼とて政事を司っているのだから。

「しかも鬼か」

「左様です」

そのことを伝える藤原家に仕える者がそれを道長にまた述べた。

「何でも恐ろしい形相をした鬼女だとか」

「鬼女とな」

「そうです、鬼女です」

家の者はまた彼に述べた。

「髪を振り乱し橋の下から襲い掛かって来るそうです」

「それは恐ろしいことよな」

道長はそれを聞いてまずは心に思ったことをそのまま述べた。

「わしがそこにあっても怖いぞ」

「はい。ですから今は宇治橋に近寄る者は誰もおりません」

家の者はこうも述べた。

「如何致しましょうか」

「如何致すも何も退治するしかあるまい」

道長は家の者の言葉にこう答えるのであった。

「鬼は退治せねばならぬものじゃな」

「はい」

これは政治家としての言葉であり考えであった。彼としても民を害し往来の邪魔をする者をほうっておくつもりはない。ましてやそれが鬼となるとだ。
「では決まりじゃ。人をやろう」
「一体誰を」
「安倍殿は今都におられるか」
安倍と名前を出したところで道長の目が光った。
「安倍様ですか」
「左様、またあの御仁の力をお借りしたい」
道長が求めるのはある一人の男であった。
「鬼でしかもそれがおなごとあっては。相当な執念を持っておるじゃろう」
「何故そう思われますか？」
「おなごの心は恐ろしい」
道長は家の者の問いにこう述べた。
「だからじゃよ」
「おなごが恐ろしいと」
「何じゃ、知らんのか」
家の者の要領を得ない返事に少し残念そうな顔を見せてからまた言う。
「全く。そういうことを知るのも世の中を知ることのうちじゃぞ」
「はあ」
「まあよい」
とりあえずここでその話は打ち切ることにした。
「それでじゃ。その鬼じゃが」
「安倍様ですね」
「うむ、すぐにここに御呼びしよう。さもなければわしが行く」
「いえ、それには及びませぬ」
しかしここで何処からともなく声がした。道長はその声を聞いて目を鋭くさせた。

「来たか」
「はい、丁度お伺いしようと思っていましたので」
また声がした。そうして部屋の入り口に黒い礼服と烏帽子の男が姿を現わしたのであった。
見れば切れ長の目を持ち秀麗な白い顔をしている。背はすらりとして高く端整でかつ優雅なものさえある。そこには知性と鋭さが共にありただならぬものを漂わせていた。道長は彼の顔を見て言うのだった。
「来られたのか」
「はい」
その彼が道長に答えた。
「安倍清明、只今参上しました」
「それでは話はおわかりですな」
「無論」
そこに立ったままこくりと道長の言葉に頷いた。
「立ったままで失礼ですが」
「いや、それは構わぬ」
道長は鷹揚にそれはよしとした。
「それよりもじゃ」
「はい。宇治橋のことですね」
「では。頼めるかな」
「無論です。それこそが我等が陰陽師の為すべきことですから」
清明は淡々とした調子で述べるのだった。断る素振りは全くなく話を最初から受けることを当然だといった様子であった。
「喜んで」
「それではすぐに頼む」
道長はそこまで聞いてあらためて清明に頼んだ。
「橋のことをな」
「わかりました。それでは」
清明は道長の言葉に頷くとその周りに風を漂わせた。そうしてそ

の中にすっと姿を消して何処かに姿を消したのであった。後には何も残ってはいなかった。

第二章

「あの方がですか」
「左様、あの御仁が安倍殿じゃ」
そう家の者に述べた。
「都で一番の陰陽師」
「はい」
このことは天下に広く知られていた。彼もそのことは知っていた。
「一体どの様な術を使われるのか」
「それは後でわかる。それより」
「それより？」
「あの橋におる鬼が一体何なのか」
道長の関心はそこに移っていた。もう事件の解決から鬼女のことに考えを向けていた。あの鬼が何なのか、それを考えていたのであった。
清明が次に姿を現わしたのは宇治橋の前であった。橋自体は何の変哲もないただの木の橋だった。だがその上にいる者はただの存在ではなかった。
「誰じゃ？」
そこにいたのこそ鬼だった。朱色に染まった顔に頭には三つ足の付いた鉄輪がありそこに蝋燭を三本立てて火を点けている。髪はざんばらであり裸足に白い端々が破れた服を着ている。爪も禍々しく伸びている。見るからに恐ろしい鬼女の姿をしていた。
「わらわの前に姿を現わしたのは」
「汝が今氏橋を占拠している鬼か」
清明は鬼の言葉に応えず逆に問い返した。
「どうなのだ。答えよ」
「答えるも何もわらわは祈願したのだ」
「祈願か」

「左様、貴船神社にな」
都の北にある神社である。
「そのうえで三十七日の間宇治の川で水ごりをしてこの姿になったのじゃ。今この姿にな」
「鬼となったのだな」
「鬼と呼ぶのなら呼ぶといい」
その眉間まで吊り上がり赤く爛々と輝く目を見せる。口も耳まで裂けまさに鬼の形相になっていた。
「わらわは。そうして」
「そうして？」
「何もかもを殺めるだけ。あの者に限らず」
「あの者、か」
清明はその『あの者』という言葉を聞いて何かを察した。それはその切れ長の整った目に微かに漂わせたが今はそれで留めた。
「だからこそわらわは。ここに永遠に留まり」
「世に災いを為すというのだな」
「誰も彼も。許しておけぬ」
最早憎しみで何もかもを失くしている顔であった。
「うぬも。ここに来たのならば」
「生憎だがそうはいかぬ」
清明はその憎しみに我を忘れている鬼女に対して言うのだった。その言葉はあくまで冷徹であり感情すら見せていない。そのうえでまた鬼に告げる。
「私もまたここには訳あって来たのだからな」
「訳だと」
「そうだ。汝を清める」
そう言うとその手に刀を出してきた。
「この降魔刀でな。さあ来るのだ」
「刀だろうが弓だろうがわらわは倒せぬ」
しかし鬼女はそれを見ても何も恐れる素振りはなかった。

「そんなもので。わらわを倒せると思うておるのか」
「倒せるか倒せないかは己で確かめてみよ」
言いながら右手持ちから両手持ちにする。そのうえで左上にじっくりと構える。
「汝自身でな」
「戯言を。では死ぬがいい」
その禍々しい顔に残忍な笑みを見せたうえでの言葉であった。
「このわらわの手でな」
「では来るのだ」
あえて鬼女を挑発してまた言ってみせた。
「私を殺すというのなら」
「引き裂いてくれるわ」
音もなく清明に迫って来た。爪を彼に向けながら影の様に速く。
「この爪でな」
「ふむ。確かに速い」
清明はその鬼女の動きを見て述べた。構えはそのままだ。
「この速さではそうそうはかわせぬな」
「そうだ。だから死ぬのだ」
また鬼が言ってきた。距離はさらに狭まっていた。
「わらわのこの爪で」
その言葉と共に腕を大きく振り下ろし切り裂かんとする。その爪が清明を捉えた。
かに見えた。しかしそこには清明はいなかった。
「むっ！？」
「言った筈。私は陰陽師だと」
空を切り裂いて思わず目を瞠る鬼に後ろから清明の声がかけられた。
「鬼を退治する者。鬼に倒される者ではないのだ」
「くっ、何処に」
「答える必要はない」

そう述べると。鬼の後ろで銀色の光が一閃した。
「ぬっ！？」
「この降魔刀を受けて滅びぬ妖かしの存在はない」
後ろに清明が姿を現わした。その手にはその降魔刀がある。それで鬼を斬ったのだ。
「滅びよ。そして」
さらに鬼に対して告げる。
「その罪。清められて眠るのだ」
「汝は一体何を・・・・・・」
「もう。何も言う必要はない」
これまでとは変わって穏やかな声になっていた。鬼も清明も。
「全てはわかった。だからな」
「そう」
鬼の声はさらに柔らかいものになった。優しい女の声そのままになっていた。

第三章

「それでは。もう」
「眠るのだ」
また優しい声を女に対してかけた。
「いいな」
「わかりました」
こうして鬼は消えた。宇治橋の鬼女は完全に姿を消した。清明はそれを見届けてから道長のところに戻った。そのうえで彼に対して仔細を述べるのであった。
「おなごが鬼になったのか」
「左様です」
そう彼に述べる。
「全ては降魔刀が教えてくれました」
「刀がか」
「降魔刀は斬る際にその者の邪念を私に教えてくれます」
「それでか。成程な」
「そういうことです。それで全てがわかったのです」
彼はそう道長に述べるのであった。畏まっているがその目の鋭い輝きは変わらない。
「それで何故鬼になったのじゃ？」
「全ては妄執と嫉妬からです」
「妄執と嫉妬か」
「はい」
清明は答えた。
「もとは都にいる女房だったのですが」
「女房か。それでは」
道長は鬼女が元々女房と聞いて事情を察した。そうしてそれを言うのであった。

「あれじゃな。亭主が浮気をしたのじゃな」
「左様です。それへの嫉妬と夫への妄執から貴船神社に祈願し三十七日の間宇治川で水ごりをしてその結果として」
「鬼になったと」
「そういう次第でございます」
そこまで話してあらためて述べるのであった。
「おわかりでしょうか」
「わかった。それなら納得がいく」
道長も女のことはそれなりにわかっている。だからこそ頷くことができたのだ。
「それで相手を呪い殺したのじゃな」
「はい、その通りです」
その言葉に対しても答えた。
「その後でその宇治川に身を投げたのですが」
「死にきれんかったのだな」
「そうして遂には鬼になったのです」
妄執と嫉妬の強さのあまり死にきれずそうして鬼になったのだ。人は時としてその心のせいで鬼となる。今度もそうなのであった。
「それで鬼は成仏したのじゃな」
「はい」
静かにその言葉にも答えた。
「一応は終わりました。ですが」
「ですが？」
「関白様、お情けを頂きたいのですが」
ここまで話したうえでまた道長に言うのであった。
「お情けじゃと」
「女のこと、どう思われますか」
また道長に対して問うた。
「哀れだとは思っておるが」
「では尚更お情けを頂きとうございます」

またそう述べる。
「是非共」
「ではどうするのじゃ」
「女の霊を鎮めましょう」
彼が言うのはそれであった。静かに道長に対してまた述べる。
「それで完全な終わりとなるのですが」
「そうじゃな。それは」
「では。宜しいですね」
「うむ、そうしよう」
伊達に関白になっているわけではない。だからこそ清明の今の言葉に頷くことができたのであった。穏やかで澄んだ心でもって。
「では神社に祭るとしよう」
「はい」
清明は彼の提案に頷いて答えた。
「それではその様に御願いします」
「うむ。しかしあらためて思うのじゃが」
道長は女の霊を鎮めることを決めてからまた言うのだった。考えに耽る顔で。
「げに恐ろしきは。人の心よのう」
「人の心ですか」
「鬼は人の中にこそいる」
道長はまた言った。
「それをあらためて思ったからじゃ」
「左様ですか」
「人は鬼じゃ鬼じゃとよく言うが」
服の中で腕を組みつつ言葉を続ける。
「実はそれを言う人こそが鬼なのじゃな」
「はい」
清明は道長のその言葉には何も言わず頷くだけであった。それ以上は何も言わなかった。女の霊はこのまま鎮められた。これが宇治

橋神社のはじまりであった。全ては人の心から。何もかもがそこから起こるのであった。

橋の鬼　　完

２００８・２・１７

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0434e/

橋の鬼

2010年10月8日13時45分発行